



【2016-09-14】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週は、雑感です。
「人間三人いると問題解決
が可能なのかも」

長野修二

人間三人いると問題解決が可能なのかも

いろいろなアクシデントや予想される故障などでも人間が三人いればなんとかなるものです。

次男がアメ車（中古）を2台購入して乗ったり、いじったりしていますが、部品の交換をする場合でも人間が三人いることで作業がスムーズに進みます。

ただし、三人のもっている能力はそれぞれ違うほうがベターでしょうか。

次男は電気系、長男は機械系、私は事務、なんでも屋系とちがった知識がベースになっています。

もっとも、車全体の機構（メカ）を把握する能力は長男でしょうか。

古いアメ車ですからサービスマニュアルはなく、それぞれのパーツを解体していくことで各パーツの構成を理解することになります。

まず、長男がメカの全体を把握して作業手順を考え、どこから作業を開始するかと、パーツの分解過程をみながら次の作業指示を出し、具体的な作業は次男がおこない、必要に応じて私が作業補助をやりながら、長男は引き続き作業の進捗状況を確認することで余裕をもって作業を実施することができます。

パワーウィンドウのモーター交換は、米国から代替品を輸入し、三人でドアパーツを確認しながら取り換えました。一人では交換不可能、補助具があれば二人でも交換可能ですが、三人いればおよそ補助具なしで交換が可能です。

また、ヘッドライトのランプ交換では、最新のLEDランプの規格は合いますが、装着するパーツがうまくおさまらないといったトラブルが発生しました。

長男が機構をチェックし、パーツの改造プランを提示するとその作業手順に沿ってパーツを切断し、グラインダーでパーツの微調整をおこなうのは、なんでも屋私の仕事。出来上がったパーツをヘッドライトに組み込んでいくのは次男です。

仕事というのは、まず全体的な視点から仕事を俯瞰する、さらに全体観から具体的な仕事に展開していく人間が必要です。

いわば作業手順の確立でしょうか。

さらに具体的な作業をおこなう技術（技能）系の人間と作業指示ができる技術系の人間、さらに両者の間にはいつ調整ができるなんでも屋系の人間も必要です。

なんでも屋というと、なにもできないことの代名詞のように言われたりもしますが、むしろ専門に固執しないで常に全体観から物事を把握しようと努める人間だと考えています。

この点では、今の時代なんでも屋は少なくなったように感じます。

なんでも屋の真骨頂は、なんといっても好奇心です。

好奇心がなければ、物事を広く眺めることもできませんし、多くの能力をもつ個性豊かな人間を集合させて、いろいろ能力の取り合わせを考え仕事を進めていこうとする調整的な発想と行動はできないでしょう。

実は、このような三者が揃うことで仕事（物事）の工程はスムーズに流れていきます。

ソニーシステムサービス時代、上司と技術系の人間が企業の全体的なイメージを創っていましたが、具体的な仕事に落としていく作業過程では、さらに議論にゆさぶりをかけたり、他の人間と調整することができる人間がいたほうがよいでしょう。

とくに具体的な作業と調整ができるなんでも屋系の人間は重要です。

上司と技術系の人間は非常に頭がよく能力が高いことはわかりますが、社員からの評判はいまひとつでした。

だいたい能力が高い人間ほど末端に目がいきません。

いわゆる理想と現実の中に埋もれてしまう傾向が強くなります。

どうしても末端の社員との間を調整する人間が必要となってきます。

上司も技術系の人間も能力が高く企業の将来像を描きながら具体的な作業もできるマルチタイプでしたが、既存の組織になじんでいるため創造の範囲が狭くなるきらいがないでもありません。

このように多くの社員との調整や外部情報のフィードバックなど両者の間にはいって物の見方を広げていくことが可能なのは、なんでも屋であり、外様タイプの人間でしょうか。

また、どなんに高い理想をもっている仕事は最初の最初は具体的な作業という他人がみると実につまらないと思えるような一歩からはじまります。

とにかく非公式に集まっては話し合い、議論し、そして具体的な作業の連続です。

それはまるでオーナー企業の経営者ばかりだったように思えます。

むしろ時間だけを取れば、オーナー経営者以上に仕事に没頭していたといえるでしょうだからこそ、新たな企業は立ち上がってきました。

さらに、そのような仕事を黙って見ていた経営者の存在があります。

陰になり日向になり、それらの人間を支えてくれました。

勿論、企業が拡大してくれば、さらに多くの人間が集まり部門が確立し、オーナー企業ばかりにはいかなくなりますが、起業や子会社の立ち上げといえども創業期を支えていくのは、理想に燃えて具体的に実行していくことができるこのような三人の人間達の存在かも知れません。

人間が三人集まると不思議と可能性がみえてくるものです。

しかも異分野の知識や経験をもち、全体観と将来像を描ける人間でしょうか。

振り返ってみて昨今の状況は、先ず企業の将来像や全体観をもっている人が少ない、さらに非公式（必ずしも業務としてではなく、この意味では残業という概念は発生しません）に会社の将来像を議論するような人間関係が見当たらず、人間が経営活動のパーツと化して、経営職、管理職を含めて日々定型的な業務に励んでいるようにみえてしまいます。

このような経営活動が続いていけば、必然的にコストダウンと同じように経営活動を縮小均衡させていくのではないかと心配してしまいます。

多くの経営書が次々にだされていますが、先ず企業の未知なる将来像を描ける人間の存在を、どのようにして生み出していくかが、企業に限らず社会全体で問われている時代なのかも知れません。